

ゼミ紹介

院生・修了生の声

三木ゼミ

教授 三木潤一〔公共経済学・財政学〕

2025年3月修士課程修了 遠藤さん（金融機関職員／研究テーマ：老後資金）

修士課程2年 門叶さん（学部卒業生／研究テーマ：コンパクトシティ）

	三木ゼミ		梅津ゼミ	
	遠藤さん	門叶さん	黒坂さん	三浦さん
2022年度		学部3年		学部2年
2023年度	修士課程1年 門叶さんは大学院のゼミにも任意出席	学部4年		学部3年
2024年度	修士課程2年 門叶さんは「演習(副)」で、黒坂さんと一緒に梅津教授の指導を受ける	修士課程1年	修士課程1年	学部4年
2025年度		修士課程2年	修士課程2年	修士課程1年

ゼミの様子

門叶：1年次の演習では、直近の1週間に調べたことをまとめて発表し、三木先生と遠藤さんから問いかけをもらいました。違うテーマの研究をしている方からの質問を受けることで、私が理解できていない部分に気づくこともあるので、とても有意義な時間でした。2年次になり、修士論文の執筆に取り組んでいます。

遠藤：私は社会人になってから感じた疑問を研究テーマにしました。実務・経験と授業で学んだ理論が結びついていく度にワクワクしたことが印象深いです。入学前面談で三木先生に「リサーチクエストを大切に」「何を明らかにしたいのかが重要」と言われたときにハッとしましたし、その言葉をずっと心に持ちながらゼミに臨んでいました。三木先生は私たちの話をじっくりと聞いてくれ、また、問いの答えを考える間も急かすことなく待ってくださいます。意図的に雑談の時間もとってくれているおかげで、研究が進まないときも相談しやすいです。

門叶：三木ゼミは、学部生・社会人を含む院生・先生という異なる立場の人が集っています。学部生にとっては先生以外にも相談できる人がいますし、説明方法や礼儀なども参考になります。

遠藤：私は年齢としては先輩でしたが、大学時代の専攻は生命化学だったため、経済学の理論を修得している学部生のみなさんは私にとっての先輩でした。院生と教員の1対1ではなく、「三木ゼミ」としてみなさんと交流することで、それぞれ得られるものがありますね。

「演習(副)」のメリット

門叶：私は1年次に梅津先生の「演習(副)」を履修しました。梅津ゼミでは、隔週で論文1編を要約して発表します。なぜその分析方法を選択するのかや、

導き出された結果の理由などを考えます。分析方法についての理解が深まりましたし、研究テーマの確定にも影響しました。ゼミの時間が他の方より2倍となるので、論文を要約するスキル、レジュメやスライドの作成力、プレゼンテーション力などもついたと思います。

院生生活

門叶：授業の2時間ほど前には共同研究室に来て予習・復習をし、授業がある日はアルバイトをしないなどメリハリのある生活を送るようにしています。

遠藤：私は勤務先の研修として入学し、同じ部署の方には業務の割り振りに際して配慮をいただきました。ただ、それでも調整しきれず本務がなかなか進まない時期はありましたし、修士論文の提出締め切り間際は、仕事と研究とで頭がパンパンでした。制度としては、大学院にいる時間を業務時間として扱っていただいたり、研究・心身のための積極的な有給休暇の取得も助めていただきました。同じ部署・人事担当部署のみなさんに応援していただけたことはありがたいですね。



研究を通して身に付いた力

門叶：計画を立てること、データ分析などの専門的なスキルなど、1つのテーマを「追求する力」でしょうか。就職活動で必ず聞かれる「学生時代に力を入れたこと」「自己PR」は大学院での研究そのものかな、と思います。

遠藤：物事を客観的に分析し、数字をもとにわかりやすい文章で表現することができるようになったことは、仕事にプラスになりました。顧客へ提示する資料に「～と思います」と書いていたものを、「〇〇という結果から、□□だと考えられます」というような、根拠のある、説得力のある文章を書けるようになりました。また、修士論文を執筆したことで、周囲には「学習(学修)意欲のある人」「根気のある人」と思われるようになったかもしれません。また、「数字に強いんだね」と言われたこともあります。経済学でいう「シグナリング効果」でしょうか。以前は窓口業務をしていましたが、現在はリスク管理の部署で大学院で得たことを活かしています。大学院進学はキャリアパスにも影響したのだと思います。

入学検討者へのメッセージ

門叶：公益大は、学部・大学院どちらも、多様なテーマに触れられることが特長だと思います。大学院では、社会人の方と一緒に学べますし、先生との交流機会もさらに増えます。研究を通して、他の活動や仕事に活用できる「トランスファラブルスキル」が身に付けられるので、学部からストレートで入学する方にもおすすめです。

遠藤：研究は体力も根気も必要と言われます。私も不安でした。でも、先輩・同期・後輩・先生方からたくさんのアドバイスをいただき、研究を進めながら「思ったよりも論文を書けるな」と思うようになりました。仕事や分野が異なるなど、何かしらの理由をつけて大学院に入学しないことは、もったいないです！きっと、みなさんも研究ができますよ。

三木：学年が異なる社会人院生の遠藤さんとストレートマスターの門叶さんが、お互いのゼミに参加しあう形が取れたことは幸いでした。お互いに刺激を与え合える良い関係が構築されていたと思います。

大学院で研究したい問題を考察するうえで、適切な専門分野を選ばなければなりません。それが学部での学びと連続しない場合、新たなディシプリン（discipline：ある学問における固有の研究方法の意）を修得する必要性が生じます。遠藤さんは、経済学という新しいディシプリンの修得と格闘し、それを門叶さんがサポートして自身の学びにもなりました。

また、当初想定していた大学院で取り組みたい問題は、考察していく中で異なるリサーチクエストに至ることがあります。遠藤さんは、「明らかにしたいこと」と「明らかにできること」の違いにも苦しみながら研究を続け、成果を上げました。特に社会人の学位取得は簡単ではありませんが、得られるものも大きいと考えます。門叶さんは、間近でその様子に接し、これから修士論文を仕上げていく際にとても参考になるはずです。

公益大の大学院では、多様な背景をもつ方々が学び、研鑽を積んでいます。現在のそれぞれの立場から新たな一歩をぜひ踏み出してみてはいかがでしょうか。



梅津ゼミ

教授 梅津千恵子〔環境資源経済学〕

修士課程2年 黒坂さん（自治体職員／研究テーマ：生活排水処理）

修士課程1年 三浦さん（学部卒業生／研究テーマ：水資源の経済的影響）

入学のきっかけ

黒坂：自治体職員として働いて7年目に大学院に入学しました。3年ずつ2つの部署で業務を経験して、人事異動のタイミングだと予想してはいたのですが、大学院への就学派遣は予想外のことでした。研究テーマについてはさまざま検討した結果、直前の部署の業務で関わっていた生活排水処理に決め、経営の効率性という観点からアプローチしたく、梅津先生に研究指導をお願いしました。

三浦：私は、学部時代の先輩が大学院に進学され、学会での発表など充実した院生生活の様子を聞いて大学院進学に興味を持ちました。物事を知ることが楽しいですし、もっと追求・追究したいという気持ちがずっとあります。学部の卒業論文のテーマは水路に関する国際条約で、大学院でも国際河川の研究をしたいという希望がありました。実は関西地方にある他の大学院も入学を検討したのですが、環境経済学の観点からも研究したいと考え、梅津先生に指導していただきたく公益大に決めました。

ゼミの様子

黒坂：1年次のゼミでは文献レビューが中心です。文献を読み要約し、ゼミの時間で発表という形式です。初めのころは、ひさびさの学生生活ということもあり、文献をずっと読み解いていくことが難しく、「この先論文が書けるのだろうか…」と不安に思っていました。1年次の後半には、研究テーマや分析方法を具体的に絞り込めるところまで辿り着きました。毎週のゼミで梅津先生にアドバイスをいただいたおかげです。困っていることを正直に話せるゼミの時間はありがたいですね。

三浦：そうですね。私は梅津先生からだけではなく黒坂さんにもさまざま



アドバイスをいただいています。問いかけをもらうことで、自分の理解が不足していることに気づくことができたり、説明することにより理解が深まります。その場で回答できないために「あとで調べてみます」と言うと、梅津先生も黒坂さんも「いや、ここ（ゼミ）でやりましょう」と言ってくれて、「こう捉えたら、答えに辿りつくんじゃない？」など、その場で回答を導き出すサポートをしてくださいます。黒坂さんの発表を聞いていると学びがありますし、分析対象を何にすれば成り立つかなど、私自身の研究に置き換えて考える機会にもなっています。

大学院入学を通しての気づき

黒坂：仕事でやってきたことを研究テーマにしていますが、業務とは違う視点で考えられるのは新鮮ですね。自治体職員として働いている間は、課題があったとしても、予算や人員の都合でなかなか対応が進められないこともありました。しかし、研究では一旦それを除いて経済学的にどうかを考えることができます。そこで導き出されたことを実務に還元したいです。それから、大学院の授業はディスカッションが非常に多く、自分の考えを発信するだけでなく、他者の考えから新たな気づきを得る良い経験になっていると思います。

院生生活

黒坂：共同研究室に来ると、自宅とは違って余計なものがないため、集中できますね。科目の課題に行き詰まったときには、他の学生に相談もできます。

三浦：私も自宅ではなく共同研究室のほうが課題に集中できます。夕方の授業の前に4〜6時間ほど自習で滞在したり、アルバイト終わりに来たりします。24時間快適に研究できますよ。

入学検討者へのメッセージ

黒坂：公益大大学院では、様々な立場や考えを持つ人と交流できます。また、自分が学びたいと思ったことに真剣に取り組める環境が整っていると思います。

三浦：公益という視点から研究したい方には、適していると思います。ぜひ見学に来ていただきたいです。



梅津：今年度からゼミの院生が黒坂さんと三浦さんの2名となり、ゼミでの議論がさらに活発となって相乗効果がとても素晴らしいと感じています。大学や大学院は人と人が集まり出会って皆で切磋琢磨する場所なんだとあらためて思います。東アフリカに「早く行きたければ一人で進め。遠くへ行きたければみんなが進め。」ということわざがあります。私のゼミでは国内外の環境資源経済学という観点からレジリエントな社会を目指す研究を行っています。院生時代に普段考える範囲を飛び越えて思索する時間はとても貴重でかけがえのないものと思いますので、ぜひ公益大大学院での学びをご検討ください。

門松ゼミ

教授 門松 秀樹 [日本政治論・日本政治史]

2022年9月修士課程修了 齋藤 さん

(中学校教員(英語科) / 研究テーマ: 教育の歴史と公益)

大学院進学のかきつけ

齋藤: 働いていて、教員に求められることが変わってきているを感じていました。ギガスクール構想により生徒たちに1人1台タブレット端末が配られ、疑問に思うことはすぐに自分で調べることができます。教員は教えることよりも、生徒自身が主体的に何ができるようになるか、どのように学ぶかを伝えることが重要な時代になりました。人生100年時代、リスクリング、マルチステージなど、生涯にわたって学び続けることが必要になった今だからこそ、教員である私が学ぶことを止めてはいけない、探究し続けることが必要だと思い、大学院進学を決めました。



院生生活

齋藤: 仕事と大学院との両立は難しかった分、時間管理がうまくなったと思います。大学院の講義や演習では課題が多く大変なこともありますが、その分仕事のメリハリができました。職場からも配慮していただき、大変助かりましたし、他の院生の存在も励みになりましたね。忙しい、大変ではありましたが、私はやりがいを感じていたのでつらくはなかったです。

研究テーマ、演習の進め方について

齋藤: 教員という立場として、教育格差(学校間格差、地域格差)、子どもの学びの不平等さに課題があると感じて、近代教育制度の黎明期である明治後期において活躍した教育者の思想や行動に対する考察を通じて、教育の公益性を明らかにすることを研究テーマとしました。

門松: 齋藤さんから、庄内地域で教育の普及に尽力した教育者について調べたいという話がありました。その人物の思想などについては本人が残した史料、教育の格差について当時の統計などの資料、この史料と資料を組み合わせる形で、いかに義務教育を普及させるかの事例を追うことにより当時の教育の意義、教育の公益性を考える手がかりが出てくるのではないかとアプローチで研究を進めていきました。

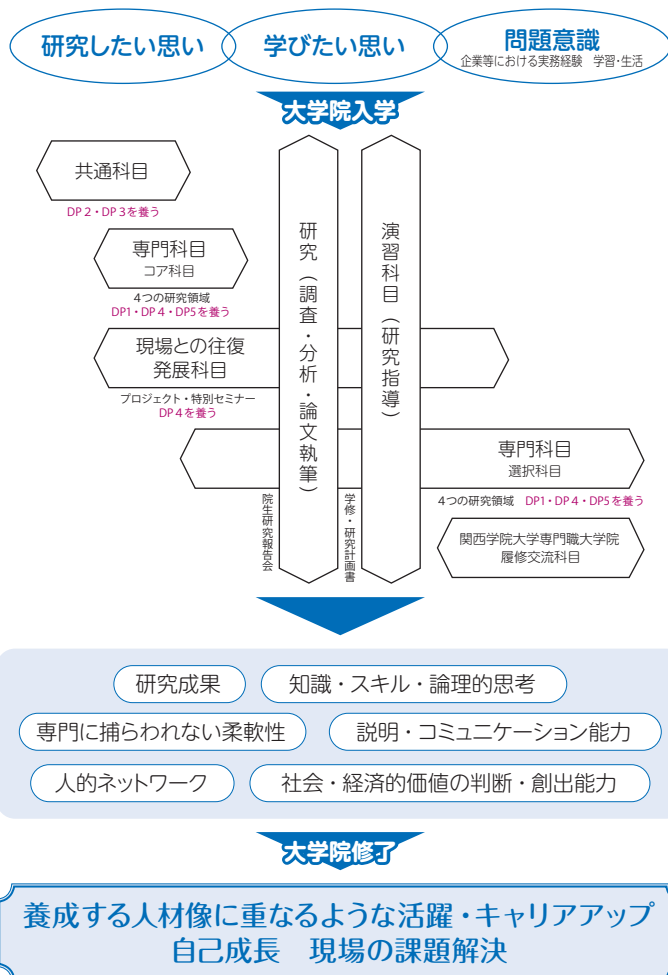
齋藤: 研究を初めて進める上で、論文の書き方、文献の当たり方、調査方法などを教えていただきました。古文書の旧字が読めなくて苦労はしましたが、丁寧に教えていただき充実した時間となりました。修士論文の執筆がうまく進まない時期もあり、もがき続けた記憶がありますが、今となればそれもとてつ貴重な時間であったと感じます。

入学検討者へのメッセージ

齋藤: 私は学ぶことの大切さを教えてもらいました。大学院修了後は学びたい気持ちが更に強くなり、3年かけて高等学校の公民の一種教員免許状も取得しました。生涯にわたって学び続けることが自分の幸せにつながっています。そういった環境が公益大大学院にあります。

門松: 大学院は行って当たり前という時代ではなく、やりたいことが明確な人が大学院に進学しています。修士課程の院生は、論文を書くことは大変ですが、探究心や熱意を強く感じます。明らかにしたいという目的がしっかりしているので、指導教員はその手伝いをします。ご自身の関心に沿って必要な情報を集めて、それを元にディスカッションを進めます。これが学部と大学院の大きな違うところなので、社会や身の回りに課題を感じていることがある方、それを明らかにしたいという思いを少しでも持っている方は大学院への進学をご検討ください。

齋藤: いずれは博士後期課程にも挑戦してみたいと思っています。その際は門松先生にまた指導していただきたいですね。



ディプロマ・ポリシー(修士課程)

必要な単位数を修得し、次の知識・能力を身につけた人材に学位を授与します。

- DP1 課題の研究に必要な専門知識及びディシプリン
- DP2 自ら課題を発見し、課題を客観的に分析し、仮説を構築・検証する能力
- DP3 課題の解決に向け多様な主体と対話し協働する能力及び社会を先導する力
- DP4 社会的責任・異文化・多様な価値観に対する深い理解力
- DP5 既存のシステムに囚われず、新たなしくみを提言できる力

